

日本百將傳一夕話

二

2325



日本百將傳一夕話卷之貳

東都

松亭金水謹撰

目錄

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

大^あ村^{むら}高^{たか}木^き阿^あ大^お大^お
 伴^{とも}國^{くに}市^し市^し部^べ伴^{とも}伴^{とも}
 吹^ふ男^{をと}皇^{きみ}田^で比^ひ狹^さ金^{きん}
 負^い依^よ子^こ夾^く羅^ら手^て村^{むら}

津^つ夫^ふ彦^{ひこ}

○大野東人
○藤原藏下
○坂上
田麻呂
呂呂

以上十將目錄終

永田姓



天忍日命之裔
道臣命七世之孫
大伴武以連
仲哀神功小仕
其子大伴室屋連
其子金村あり

大伴金村

人皇三十七代 繼體天皇のめろ人
今嘉永六丑と一千三百四十年成

大伴金村者 仁賢天皇晏駕之

後誅平群真鳥及其子貲 武烈

即位以為大連其後迎 繼體天皇

于越州而立之

金村其鳥の物語ハ既ハ述曾印行セ世ハ行々といふをいども。彼ハ元末成
作ト交ヘテ所謂蛇足ありあり。今ハ編ハ其記ヲ摘メ聊ハ戲言ト雜ヘテ

おれと君のふれあひ

君三

三

5

2

夫のとこ千群の駒来り。その宿がえり大に憤り中にお互りてこまに排つた。その両
 個が情態とあつて戯ふとありやと思ふと歌を化して你トあふ駒とて号ふ者
 うろろあり。緯長けまばらぬ載る屋簷と傲りぬ人。家小駒が歌援ふ。
 通ぜしとを曉るあり。そのまふ此処とてまて金村が宅小住さ。美鳥父子偕上あり。
 竟小駒家へ傾けんとて迷ふ代ふとト。即時小千群の兵が突くと。影援が宅と
 村言をていそ。大まの命小使ひて則駒とて謀りし。其まらんとて及む。渠ま
 ら兵を設く。その仇と撃んとまて。其兵に神速と貴ぶ渠ま。緯の怒ぬまふ。
 攻よせあべ勝利ありて。玉成とてりんと咬て大まも飲びぬ人。其まも千の軍
 と倍く。あふまもが第小あう。其まもは権勢傳えと。秦の趙高漢の世の王莽小
 日猶起こま。一門所従多しとのども。緯不意小登りて。如何と申。珍方あふ。

軍の爲小戮せしと。み身及び宗統の従は悉く誅せしとて。さうの國城を一
 ト。あふまも。備小金村が功績なり。斯く金村大ま小討ひ先帝。億計
 天皇の皇子。陛下の他小あふ。殊小叔年横行ある。天下万民と悩む。其城
 后と平けぬ。誰ふとて作さる。其まもは位小即りひて。其業とあふめせ。
 と三度の神宝と献つ。さふ新く有司小令ト。泊瀬列城小壇場と設け。其位小即
 り。人々都とて小定めあり。金村連とて。大連とて。さうなる。あふ天皇の性質
 剛強小ま。小の親と自ら聽刑罰をり。あふ必出てとて。後あふ。是小
 遠近の民。其忍ま。慄とて。身と安さる。あふ天皇屢殺戮とぬ。あふ
 孕める梯の腹と裂せ。胎中。小児の舍る親と死す。一め人々捕へ。其髪と妙を
 多く抜く。樹上小昇り。其樹と伐倒し。撓びて死す。其笑ひぬ人。あふ人
 と赤條と。あふ水小漏い。浮つ。沈る。漂ふ所と。三陵あり。緯とて。伸べ。その腹



武烈帝
 兇勇
 親
 刑罰を
 覧る

為侍唯あつた。いと怪あつた。王更お尋さる。自若く坐す。以て金
村らお尋詰。案お察し。遂ひあつた。せよ。此のう。と言。王固く辭。あひ。元。み
万民の父母あり。吾幼稚より。吾都。あつた。於て。君子の大道。と。い。美。為。宇。宙。の。君。と
らん。有。使。あ。る。人。と。擇。帝。位。お。即。奉。つ。と。秋。の。久。あ。つた。金。村。始。め。諸。の。臣。一
月。お。請。奉。る。と。い。と。切。あ。る。是。より。高。河。内。馬。門。首。荒。翁。と。い。の。王。と。聲。より。あ。つた
篤。一。這。回。金。村。等。が。迎。る。心。如。此。と。あ。つた。と。曉。す。容。お。王。お。の。う。と。若。う。あ。つた。小。二
日。三。夜。と。経。て。既。お。群。臣。の。言。と。發。せ。と。お。放。て。王。思。さ。く。と。お。荒。翁。の。好。意。と。あ。つた。ね。現
お。や。貴。族。と。論。の。ど。但。其。心。と。重。ぜ。よ。と。い。の。荒。翁。お。放。て。是。と。あ。つた。と。即。河。内。の。小。樟
葉。宮。あ。て。お。位。お。即。あ。る。繼。體。天。皇。則。是。あり。後。お。荒。翁。と。貴。い。お。人。と。金。村。の。計
ら。ひ。お。より。天。皇。お。位。お。即。あ。る。お。大。連。と。る。と。故。の。如。く。人。々。舉。ぐ。る。ひ。あ。る。と

大伴大連金村
か子あり其兄と
磐石のふ俱み此
役お軍人

佐用姫の播磨佐
用郡の人の女あり
彼地お社ありて
嘉祥二年十一月
此と官社お預と
續日本後紀お載

大伴狹手彦

人皇三十代 欽明帝の時の人
今嘉永六年と千三百九年に成

大伴狹手彦者 欽明帝時奉

詔率兵航海以破三韓其妾曰松

浦左用姫

の文卿不審あり。欽明の朝云とあま。と。狹手彦仕那と救ふ。と。い。の。時。新。羅。仕。那。と。侵。す。
宣化帝の二年あつた。と。三韓と破るとあま。と。い。の。時。新。羅。仕。那。と。侵。す。
因て狹手彦と遣り。人。と。救。ひ。彼。と。仕。那。と。三韓と齊一破るとあま。と。い。の。時。新。羅。仕。那。と。侵。す。
お載る所斯の如し。本文何より。記録お授る猶。後。の。底。評。と。俟。の。と。

周ミナモト不ミナモト仁ミナモト仕ミナモト那ミナモト國ミナモトハミナモト本ミナモト名ミナモトトミナモト意ミナモト富ミナモト加ミナモト羅ミナモト本ミナモトトミナモト人ミナモト。
 宗ミナモト神ミナモト天ミナモト皇ミナモトのミナモト六ミナモト十ミナモト五ミナモト年ミナモト。弒ミナモト前ミナモトのミナモト八ミナモト等ミナモト。

浦うらふ額ひらみふ角つのある人ひと来きまきり。何なん処ところの人ひとぞと問とけとまま。加か羅ら玉ぎよくの王わうの子こふふ。名なの都つね怒ぬ我われ。

あらしの地味と按る小住那ハ今の釜山浦ナ。西ある海濱あり全羅道
阿羅斯と号する處より東にハ麗山と號する處あり。麗山の南に
曾人種の地あり。

天皇殊亦愛多以て玉小南條
 紫戎奉る國殿とて玉未貢の作ゆあり。天

三平。久き寺てら及人ひと并金力なりかねり名と文めて土那國どなくにより命あり。

[illegible]

是帝の行を前所とす奉るは拾遺の所在帝の行を前所とす

困号と改め彌摩那匡といふ新羅人といふ人其記し有縁の綱と奪ふといふ

より二國怨を結く。相挑むと既ふ久し
欽明帝二十二年ふ及び新羅の

爲ふ減さきて其紀絶うとて人○又云加羅人祇前寄飯の浦ふ来る。顯ふ

角のまゝに成りて。その所と角麿と更じ今の敦賀是ありとぞ。然まども大々非^ひ

うらとく 月比ま つねが
 羅王の王多召の郁 怒茂とあまふ
 不 是 父 子 更 母 弟 弟
 順 小 弟 弟 弟 弟

[illegible]

古くは福せと申すといふ所か、
いそぎよくさへいそぎよく
いそぎよくさへいそぎよく

船及ひ狭手彦の両将流雲肥前の王に至る。船におふ狂男を、瀟湘と云ふ

疾ハヤシハ任マカ那ナ不フ解カニ新シン羅ラの仇ウラと救サツえんと脱ダツふとの津ツ不フ獲カを解カとたその妾メケ松マツ

用非ハ其の別とて哀悵。船の行と作ごうふ。其の船既波浪に隔る。佐用非

領巾と脱てとまひうち揮下。折けどもその甲斐あり。さふけん大い悲こ

石と化す。と望ま石と号するや。その論書不委しけり。今更不教言

但望夫石のとも行々痛あり。くづくけとバ説を有く

按るは佐用非良人の別とて恨み。ふお登りて船を眺望間遠く隔ふあふひ領巾で揮
 てうち拒き。竟に化して石とあり。その志最情むべし。然れども人化して石と
 あること不審し。まゝ其山と号て巾振ふといへば古代のかるこふよりて地名ふ
 負さの常あるとも。郷人ことと懐きて神にお祀るといふ所の其山上ありて空あり
 あり。奇異あるものありしふや。事蹟詳ふ知ず。松浦佐用非石魂孫と歟
 しる書あまた。例の戯化あるべし証とあらう。巾振ふと佐用非官の今現ふ在
 所あり。その山の名ともなり。猶古くよりいひ傳へたり。既に万葉集の歌
 ふまの人まつさよ非妻無ふひとありしあり。あつた山の名」といひめは説撰と
 せざるは是ぬべし

アベノオミ　ツノセシオホ
阿倍臣ハ其先大
彦命より出

カネトクテンワヲ
孝徳天皇の時
アラタキノヒ
荒田井比羅夫と
いふりのありとれ
ドウタイイシ
同名異人あり

阿^ア部^ベ比^ヒ羅^ラ夫^ブ者^ハ
 阿^ア部^ベ比^ヒ羅^ラ夫^ブ
 夷^ス平^タ之^シ又^マ伐^ツ肅^ア慎^ハ獲^エ生^リ羆^イ及^{ケル}其^ニ
 皮^カ若^ソ于^コ
 人皇三十六代 齊明帝の弟の人
 今嘉永六丑を 千二百四年に成
 齊^{サイ}明^{マイ}朝^ン討^{テウ}蝦^{ウチ}蟇^ア

按る所阿部と書紀及び諸書不阿倍に化す。あの中獨部の字を用う
 ののハ恐くハ傳寫の誤ありん書紀に引田臣比羅史とあり
 熊ハ熊の字あり。本草綱目及び三才圖會等と按ぶるハ熊ハ自然の國名
 ありん乎と見えり。猛獸多力よく樹木と抜く人ハ遇ハ人のやうて是と撰む
 ぞえんハと見え。あそハアソヒと見え。然とて由陽ハ陽ハ書くと貳心ありんハ書くと

阿倍比羅夫の詔

まゐるえり。皇極天皇の重祚あり。天豐財重日足姫天皇と云は即位の
元年夏五月。殊小異とてあり。空中何方ともなく飛来するものあり。
その貌唐人の如し。まさしく油絹の笠を戴き。葛城の嶺の方より馳来り。腰刀に
懸る。且くあまの午のつゆ及び再住にの松の嶺の上より飛来し。又より西に向ひて馳
来る。その行方と云ふはとぞ。こと実一奇多かり。比羅夫の詔かたむけしこと。
此世の同ふつて童蒙の詔柄とあること。む。さ。ん。こ。の。帝の元年夏五月。飛来するものあり。
とて云ふ。阿倍比羅夫は自ら兵船百八十艘と懸へて征伐せむ。比
羅夫被処ふに對ひ大兵勢と漲て攻撃と急なり。あふがて。鰥田傳代
の二郡の飛来ども。大に恐怖て降をも。但鰥田の飛来の酋長は。その名は恩荷
と。人則官軍の陣にお来り。こと固より朝家へ對し。とて雲の心あり。然るに

何者う。詔を叛き奉つこと言ひふ。將軍征伐して下す。あふむ。この所の
人民も。常より夫とて。使さる。肉と食ふ。故に歎を射るの料あり。努害
心ある。あふ。偏よ。つ。鰥田の浦に。飛来。神の罰と。後人と。云ふ。
その。所。候。実。あふ。比羅夫。別。その。罪。と。許し。恩荷と。云ふ。上。と。授け

の四年。古き。冠の。制。を。廢し。内五年。改めて。十九階の。冠。を。制。せらる。大。後。より
小。紫。小。至。る。まで。六。冠。及び。初。位。の。建。武。冠。も。高。制。成。用。あり。と。遠。回。新。制
せらる。又。十二。冠。大。華。小。華。大。小。山。大。山。小。山。各。上。下。小。分。十二。階。古。制。と。合

と。十九。階。と。ある。但。その。世。小。博士。高。向。玄。理。が。考。定。せ。め。八。省。百。官。と。云ふ。
傳。代。津。輕。二。郡。の。郎。頭。と。定。め。有。間。の。濱。小。飛。来。と。成。集。令。と。大。小。答。一。帰。ら。り。あ
ける。と。の。人。吏。より。比。羅。夫。兵。と。率。て。肅。清。せ。し。付。つ。凱。陣。小。及。び。生。還。と。云ふ。二。の。罪

空中
異形の
龍小衆
赤ぶ



の皮七十枚と捉齋を献する

按ふ肅慎のふへ今女真といふ。その地契丹の東北に在り。靺鞨の属郡あり。之より先新羅の人完靺氏といふ。其地小多す。遂に世を累ね。孫阿骨打といふ者至りて帝と称せり。國人も鹿皮を以て衣。及て衣と衣と。書紀と按ふ。欽明天皇の初依波の時の北御名部の裔岸小異人。松平末王止まる。是肅慎人なり。春夏魚を捕り食ふ。秋は狩人。冬は鬼。其の二。秋に近付。比治の東。禹武邑人。推子を取。婦を食ふ。火の上におく。化して。二個の人となり。火上を飛騰す。将を相闘ふ。邑人深く怪む。取て金をも。故の。人有り。占ひて。是邑人鬼の爲。迷惑する。と果して言のめ。ふ。於て肅慎の人。冰河の浦。徙り居る。浦の針。大忌。近づけ。湯と水と。煮。死する。の。半。過。ぎ。骨。炭。を。換。ひ。因。て。あ。と。肅。慎。の。隈。と。い。ふ。と。又。え。い。り。

朴市田夾津

人皇三十九代 天智帝の時の人
今嘉永六年迄 千九百九十六年 成

朴市田夾津者受

天智帝之命

救百濟與唐兵大戰于白江

擊死之

孝德帝の紀と按ふ。朴市秦造田来津とあり。夾は當ふ。来は來。俗に云。又云。月帝の五年。古く人皇子。蘇我國に臣。川。堀。物。部。朴。井。連。椎。み。吉。備。笠。臣。垂。倭。漢。文。直。磨。朴。市。秦。造。田。来。津。等。と。誅。叛。し。人。吉。備。臣。よ。ま。と。中。大。兄。小。弟。中。大。兄。宮。祖。小。弟。と。按。て。古。人。皇。子。及。び。其。等。數。と。誅。以。と。云。此。時。田。来。津。亦。何。め。罪。と。免。る。と。い。へ。ん。

君玉堂藏板

書紀の綱考ふいとく（元ホシキヲヲスニイフ。ツミシテ多シゲサ井ノムラジアタサレ。ヒヤクセダタノミヤツタク）或本續此末云別使大山下狹井連檳榔（アタサレ。ヒヤクセダタノミヤツタク）小山（アタサレ。ヒヤクセダタノミヤツタク）下秦造田来

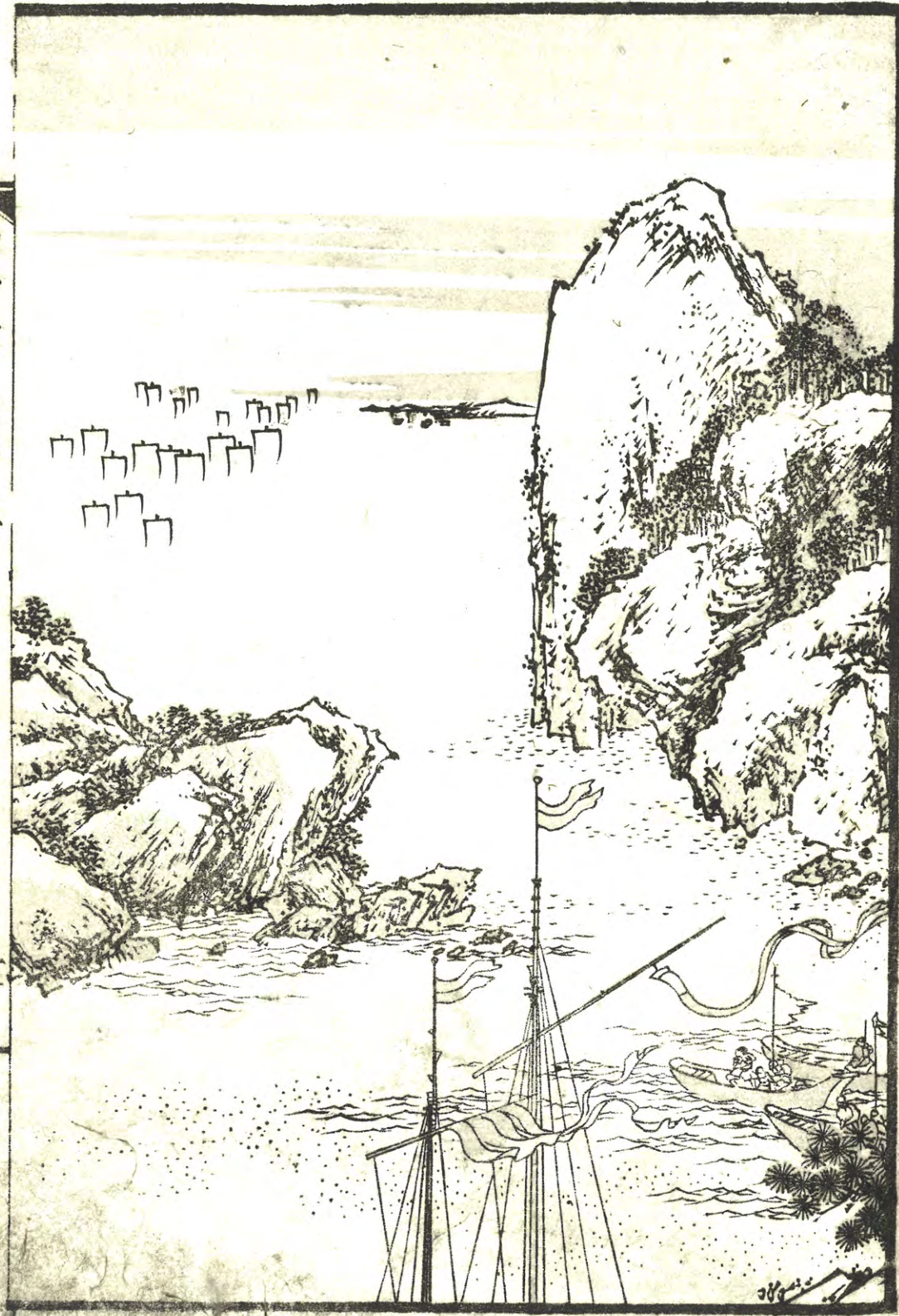
百將傳

朴市田來津
 百濟の
 援兵とて
 白江村に
 戦ふ



百濟傳一ノ書卷之三

新王世系



百濟傳一ノ書卷之三

三

新王世系

く放ちし。鑒みせんとす。倭軍の勢ひ猛し。渠の水戦ふ。引いて進退莫測。意の如く。前あつとす。後不顯。尤と云ふ。右に撃。我艦自在。得ふけ。倭軍なり。難儀。及び或ひの斬ら。或ひの射ら。白江の水。屑とす。其数。擧て等へ。朴市。田来津。先刻より。船端。不測。立。法。卒。と勵。水主。掛取。等。下。知。と。傲。在。る。味。方。頻。下。射。立。と。水。不。測。軍。勢。と。從。心。中。大。快。り。適。官。軍。お。ね。と。遠。く。異。邦。の。械。と。戦。ひ。斯。の。如。く。不。利。と。失。ふ。と。令。く。わ。の。選。て。再。び。進。み。面。と。あ。せ。ん。若。し。の。所。に。死。ん。ぬ。と。天。と。作。て。歎。息。し。頓。く。又。勝。て。る。而。又。の。緯。と。推。入。て。唐。船。一。艘。を。案。里。面。の。揮。ひ。突。き。ま。い。吾。討。取。て。高。名。せ。ん。と。前。後。左。右。お。ね。と。拵。と。田。来。津。の。云。双。の。勇。と。彰。近。づ。り。の。で。利。殺。ま。と。脱。ふ。と。十。餘。人。お。及。べ。今。の。賊。軍。と。外。の。他。の。船。へ。逃。下。り。擧。げ。押。て。遠。く。逃。る。田。来。津。の。今。の。戦。ひ。後。と。殊。に。不。敵。箇。所。を。負。け。ま。い。と。也。是。追。と。斂。と。楫。不。衝。て。海。底。へ。逃。入。て。果。さ。し。ハ。勇。ま。う。り。に。果。勢。あり

天武天皇第十三
にありし人皇子

皇子四人あり

第一と

長屋王と正二

位左大臣

第二と

鈴鹿王と中從二

位式部卿

第三と

河内女王と正三

位

第四と

山形女王と正三

位

高市皇子

人皇四十四代 天武の皇子 薨る年不詳
今嘉永六年と九千七百七十二年

高市皇子者 淨見原帝與大友皇

子戰時破大友軍而有功

大友の 天智帝の皇子あり。人材頗る衆人。不類あり。眼中。精。常。人。の。風。範。あり。唐。の。使。劉。高。と。り。り。の。皇。子。と。親。く。交。り。て。い。く。氏。骨。世。間。の。人。お。似。む。実。み。の。國。の。分。お。非。び。と。秘。せ。う。と。あ。ん。本。朝。時。と。化。る。こと。大。友。皇。子。お。始。ま。る。と。り。り。の。修。人。或。ひ。い。大。津。皇。子。と。り。り。の。但。大。友。皇。子。の。説。此。山。か。入。り。給。と。あ。ん。と。持。一。言。と。化。る。人。金。鳥。臨。西。舍。鼓。聲。催。短。命。泉。路。無。實。主。此。夕。離。家。向。周。ふ。う。と。あ。の。と。記。と

年歷右門

天武之軍將也壬申

大友雉經其功尤高

われらのしむる世にあり。ゆゑ
大友皇子の一夕の夢ふ。素戔の道人来つて日輪と授く。皇みことを受て拜し。
ある時ふ人あり腋下より是と奪入。皇みことと源足小依る。源足のいつて壁相
万世の後忍らう。君の職位と奪入りのあん然きども天道収味なり。有種ふ
おかしき。徳政情めあり。その女を以て是小娶り。然る皇子方の材と懸
威お誇りて人々畏伏せしむる。道徳を修せば果して前憂の禍お預りぬ。

事歷右一

定^{サダメ}大^{ヤマト}倭^{カハチヲ}河^カ内^ツ且^ト與^{アフ}近^ニ江^{ヘイ}兵^{シバク}屢^{タカヒ}戰^{ツメニ}遂^ニ

經營一方軍功居多

按ふ上古嫡庶の分を定むるを或ひ人材を擇む或ひ老幼を後入とする
 嗣王たるを或は其の須ふ道と御世と考ふる舒明の皇子多く坐どもを以て
 此牙智奴王の皇子皇極女王とて天子と爲す此牙智使嗣王の孝使と
 有間皇子と措て此後才より天智舒明の禪でるひ天智の皇子と措て此
 人々太子と定めぬを新て動すは其の如きなり後世の分を定むるを偉ふを武

25

大のづん壬申の乱かかづひて格々物類とせん耶と云ふ也。
 故ふる人と合書ん。その功績と述さるる

故ふる人と合書してその功績と述べるなり

大海人皇子^{みぎ}が心^{こころ}より。出^いで人の心^{こころ}を安^{やす}んじ。我^{われ}が安^{やす}んじ。固^{かた}く。皇^み子^こと相^あ長^{なが}ま^はい。あつた。

友皇子。あは太政大臣とありて万歳と掌すありしが。或は東宮とありて

と云ふ事あり。此の皇太子は立身未だ

りんとおび
 苗まづ
 ほうろく
 名と成んと
 秋さる
 考へ
 退く下とい
 と懇ろ
 今我

と更ふ退くものありと。再びあやう命令ふ。舍人等のうち半は番より半は象師へ飯を
しど。かくてあふ年十二月 天皇 天智天皇 天智天皇 天智天皇 天智天皇 天智天皇 天智天皇 天智天皇 天智天皇 天智天皇
の皇子大海人ふまをていそ。臣私のうありて。独美濃へ。武蔵。越前。美濃。尾張の
人々と集合ふ。美濃と營むと。別ふ兵と執り。わくふ。是の儀ありん。かあ。大君あり
あふ。下。若連ふ。避る。の。悔。と。返らぬ。多ありん。と。ま。一人。近江の。系。より。倭。へ。あ。所。
ふ。斥。候。と。ま。つ。美。濃。の。郷。あり。留守ふ。命令あり。若連の。ふ。は。え。ま。つ。今。の。糧。と。あ。ん。と。
ま。と。事。実。定。う。ふ。ま。え。け。ま。バ。大海人。歎。と。い。そ。朕。位。と。讓。り。世。と。通。う。い。宿。と。作。り。て。天
年。と。安。く。送。り。ん。る。の。あり。然。る。と。併。の。張。構。あ。る。奈。い。つ。ま。事。と。束。縛。て。死。せ。ふ。能。ん。是。止
る。と。い。ふ。と。あ。う。と。六月。壬。午。の。日。ふ。あ。つ。て。村。國。の。男。依。和。降。り。の。長。君。も。月。毛。の。君。廣。と。ふ
命。ト。汝。等。三人。美。濃。ふ。安。八。摩。郡。の。湯。沐。の。令。多。良。品。降。ふ。示。し。先。美。郡。の。去。せ。登。し。且
小。司。馬。ふ。觸。て。危。軍。と。率。ひ。急。ふ。不。放。の。道。と。塞。ぐ。べ。朕。も。直。ふ。ふ。入。ら。ん。と。命。ト

あふ。折。り。二人。の。臣。進。と。り。入。り。是。を。以。て。不。可。あり。近。江。の。初。廷。饗。と。う。計。策。と
廻。ら。と。脱。ふ。と。の。一。挙。ふ。及。ぶ。然。と。二人。の。兵。自。り。あ。ふ。入。ら。ん。と。あ。う。ふ。懐。ひ。に。じ
と。あ。つ。て。い。ふ。ふ。も。あ。ふ。あり。然。ら。ば。見。よ。大。分。君。惠。尺。黄。書。遠。大。伴。逢。良。志。摩。南。と。せ
守。新。の。司。高。坂。王。の。仲。ふ。性。て。秋。津。の。鈴。と。毛。佐。ト

ふ。こ。あ。り。その。秋。ふ。性。て。の。鈴。と。毛。佐。音。ふ。應。と。近。江。の。士。馳。集。と。る。相。見。あり
若。連。の。鈴。と。毛。佐。ふ。が。て。ふ。志。摩。へ。飯。つ。て。と。ま。と。ま。せ。惠。尺。近。江。に。お。け。高。市。白。土。と
大。津。白。土。と。伴。ふ。い。て。修。勢。ふ。性。て。逢。下。と。逸。ふ。命令あり。兩人。畏。ふ。と。地。お。た。り。大
和。の。留。ま。る。高。坂。王。ふ。も。と。い。ふ。も。鈴。と。毛。佐。因。て。命。の。や。く。志。摩。へ。戻。り。惠。尺。近。江。に
赴。き。ら。若。野。宮。大海。へ。あ。る。い。あ。ら。る。あ。ま。入。ら。ん。と。脱。ふ。あ。う。あ。う。の。ふ。も。倭。倉。卒。ふ
あ。る。軍。だ。の。倭。へ。大。養。連。大。伴。が。鞍。を。さ。と。献。て。宮。と。見。ふ。宗。せ。来。ら。ん。死。て。妻。ふ。宗。と



東國へ
赴き
大海人皇子
兵を従へて

天武と
大友の
皇子
合戦



に
何
也
乃

さうの大軍礼とまで。実小蜘蛛のふと散すや。八方一散礼を大物智学大不怒り。主塞
 がつて劔と抜きち逃来さるゝのと斬とらと程誅さるゝ逃来さるゝ今更止す能はれ。その
 間小牧万の勢進と近づき殺すやど小智さるゝ今防さるゝ。竟小橋をぬて斬とさ。頻
 下迫とて近江の將大養連五十君及び谷直陸手等と栗津の市小練り。下下
 大友皇子。遁入るゝべき所なく退りてふゝ小強と自ら難きて薨下るゝ左右大將と指
 めと。ゝゝゝ教とふ亡失さるゝ。さ物部連麻呂の府舍人一支輩。皇子の死小殉ふとぞ。ふ
 於て除黨と搜し或ひに誅し或ひに流し。一挙小大礼成さるゝ。大海人皇子還幸あり。則
 則位小即るゝ。天武天皇とす。是より聖運最著明けとて専ら。知れらるゝ
 人の功績小認めあるゝ。後世その功を賞し。百將の列小擇まさるゝ。猶奉るゝ。然え
 あれど近曾印め甘き皇統國會ふ。いと精く裁き。這あゝ多く省さるゝ。

大野東人

人皇は十五代 舒雲帝の時の人天平十二年崩御
今嘉永六年を 千六百十三年に成

大野東人者

聖武帝時藤原廣嗣

反^{ソムク}于^ニ筑^{ツク}紫^{シニ}東^{アヅマウ}人^ウ美^{ケテ}

勅チヨク往イ戰チ廣コ嗣ヒロ敗ツク
イ

ハ
ウ
ス

廣嗣筑紫の謀叛するや。元玄防僧正が横行ふ。帝聰明ふまき、
 只常侍ふ心で飯せしと云防てめて是より。廣嗣せりて非なりと云。
 實に忠憎の反竊せる。今ふ終て死に。帝中い過るた王能て。然と
 ども廣嗣臣として諫の容りとせると怒り、竟に叛きに。汚衣で還り、怨念を成
 て空しく去防といひ、騰殺する。主後頭と奥御寺へ墮り、是照する因縁あり。

百斗俱一又言

君三子乘之

〇九

藤原の
廣嗣
諫奏



玄昉僧正
罷下詩
瑶行の
圖



来るに誰と問ひ果ね大將軍の大野東人副将の紀服麻呂。其餘安部忠麻呂及び
小長谷常人凡河内内膳等ありと喚ぶ。廣嗣忽馬より下り再拜之罪と陳べ然れ
ども程伴さび脱し官弁と偽り執つて中の中兵と拒く。其隙隙の隙ありんと則官軍
と進め撃つ。廣嗣心猛しとある。從ふ兵卒多し未ね敵目ふ勝る大軍之力竭きしを
竟る自身首刎て死しぬ。官軍とこと函ふ納め。凱歌を唱へ鼓を鳴り妻及及び厚賞
殊一玉中平定ありけし。其後諸陣陣せし。周大將軍と始めく恩賞を行ひ
武名と海内を輝う。

按るふの時廣嗣が叛逆敢て朝廷に對し。ちと害んとおふ。玄昉が汚行を惜じ
へ固より。下道法改と盛感せん。奏し。ちと公使入其儀のするにち吉備あり。
彼人處内英雄の吹えありて。更ふの犯す処とふ。廣嗣が心あり。猶不審
さる。然あり。や。廣嗣亡びて。其の靈崇とふ。仲小崇と云。或は境と云。といふ。未詳

内大臣鎌足公三

藤原不比等

其子

藤原宇合

其子

良繼

其弟

百川

藤原藏下麻呂

其弟

鎌足の孫不當

藤原藏下麻呂

天皇十六代 孝謙帝の弟の人 奉安字六年
押勝氏 今永承六世を千五百五十七年 成

藤原藏下麻呂者 孝謙御宇惠美

押勝反奔 江州使諸將討之不利藏

下麻呂急進擊獲押勝斬之

孝謙帝女に仲成道遠等と愛り。以て頗る豫行の儀あり。いと。孝
道明あり。且武備と忽あり。其の。聖武帝五月ありて崩。あ。周
瑞午の節命羽觴と奉る。あ。瑞午の節と止め。さ。人倫とて。百行
の基。孝なり。先あり。故。諸ふ。孝経。一。と賜ひ。とあり。天平宝字
元年。月詔。之。新。職。瑞田。と。重。年。毎。優。劣。と。試。武。藝。と。與。さ。む。と。是。え。う

しん

ひて元年大綱
帝の才二ふりてそ
徴令と云俱と
の中衛入
廢帝元年仲冬
ましく隆う。立
祖王と廢し
資字稱德孝
今あれ

武彦を慣ふこと
 かくて大福ひかり
 守直ふ性白

道鏡
女帝に愛せ
られし
大小騎
休



坂上阿蘇麻呂の話

阿蘇麻呂は孝謙上皇の命を受けて惠美押勝が訓儒麻呂と討斃す所の脱藏下麻呂
 が條下に在り。かへ後道鏡はよく機勢を察す。和氣の渡麻呂とて字依み使。皇統は
 嗣へくけとざる事あり。これ因て帝田舎官の行幸あり。道鏡怪とて斬る。道
 鏡の餘をたねて向ひ食ひかへまう。これ因て西宮小崩トあり。この時いまだ純嗣あり。道
 鏡とぶたに縁を帝位お昇らんとす。群臣天智の孫白壁とて御位お即し。是を光
 仁天皇と稱す。孝謙阿蘇麻呂道鏡が深縁を知つて是を怨み大に心をく。天皇親とて別道
 鏡と下野ふ。其もの別處とて依て配流せり。其大功ありて後將軍拜せり。

按ふ国史略ふに。當時大臣不能以道鏡至祖宗廟數其罪而後正刑。是万
 世之遺憾也。とある。も本朝の傷宗有備を大に在て是と忽然ふ。いふ所必あり。

日本百將傳 文話卷之貳 畢



亦
 直
 暁
 人
 玉
 丁